

香取遺産

Vol.104

圓生涯学習課

☎(50)1224

光明院阿弥陀堂

源満仲ゆかりの古刹



▲阿弥陀堂(保存修理直後)



▲塚上の五輪塔

多田地区に所在する光明院は、平安中期の武將で、多田源氏の始祖である源満仲にゆかりのある真言宗の古刹です。本尊は大日如来で、八幡山西福寺と号します。

寺伝によれば、天慶のころ、下総国で反乱を起こした平将門を追討するために下向した満仲が、亀甲山(香取神宮)付近に陣を構えたところ、そこから見える地勢が故郷の摂津国多田荘に似ていることから、この地を多田と名付け、八幡宮を勧請するとともに一寺を建立したとされます。

境内には、満仲供養のためといわれる塚があります。高さ2mほどで、周囲に墓域や擁壁などがあり、その形状は明確ではありません。塚上に高さ約1・8mの五輪塔が立っています。ただし、この五輪塔は、頂部に宝篋印塔の宝珠や九輪が載るなど、本来の形状とは異なります。いつの時期か石塔を組み直した際に誤ったものと思われるます。塚は傍らの八幡宮とあわせ、市指定史跡となっています。

塚の北東側には、県指定文化財の阿弥陀堂が隣接します。方三間の寄棟造、茅葺き屋根の仏堂で、近年は前面屋根の劣化が始まっています。四周に縁を廻らし、建具は前面中央に嵌め殺しの格子戸、前面両脇間および側面手前二間は引き違いの板戸となっています。周囲に配された十二支が彫りこまれた墓股や組物などには胡粉や彩色の痕跡が残り、かつての彩り鮮やかな姿が想像されます。また、内部は天井や組物間の琵琶板に彩色画が施されています。

このほか、軒下の組物、柱の粽(上下端をすぼめた箇所)、須弥壇、格天井など、禅宗様の建築の特徴が残っています。

この阿弥陀堂は多田対馬守平胤秀という人物が、祖先の冥福を祈り天正6年(1578)に建立したと伝わりますが、以前実施した保存修理の調査では、棟札などの建立を裏付ける資料は確認できませんでした。ただし、各部分の様式的特徴から、少なくとも近世初期に遡るものと推定されます。